

第一六章 神界旅行の三（一六）

扇でたとえると丁度骨を渡って白紙のところへ着いた。ヤレヤレと一息して傍の芝生の上にも身を横たえて一服していた。するとほるか遠く北方にあたって、細い幽かな悲しい蚊の泣くような声で、「オーイ、オーイ」と自分を呼びやらしい声が出てきた。自分は思案にくれていると、南方の背後から四五人の声で自分を呼び止める者がある。母や祖母や隣人の声にどこか似ている。フト南方の声に気をひかれ気が付けば、自分の身体はいつのまにか穴太の自宅へ帰っていた。

これは幽界のことだが、母の後に妙な顔をした、非常に悲しそうに、かつ立腹したような一口に言えば怒ったのと泣いたのが一緒になったような顔した者が付いている。それが母の口を籍つていうには、

『今こうして老母や子供を放っておいて神界の御用にゆくのは結構だが、祖先の後を守らねばならぬ。それに今お前に出られたら、八十に余る老母があり、たくさんの農事を自分一人でやらねばならぬ。とにかく思い止まってくれ』

と自分を引き止めて、行かそうとはささぬ。そこへまた隣家から「松」と「正」という二人が出てきて、祖先になり代って意見すると言って頻りに止める。二人は、

『お前、神界とか何とか言ったところで、家庭を一体どうするのだ』

「松」……聖師さまの親戚で叔父にあたる上田次郎松氏のこと。

「正」……上田次郎松氏の母親で上田ま

と喧しく言いこめる。その時たちまち老祖母の衰弱した姿が男の神様に変ってしまった。そして、

『汝は神界の命によつてするのであるから、小さい一身一家の事は心頭にかくるな。世界を此のままに放つておけば、混乱状態となつて全滅するより道はないから、三千世界のために謹んで神命を拝受し、一時も早く此処を立ち去れよ』

と戒められた。すると矢庭に「松」と「正」とが自分の羽織袴を奪つて丸裸になし、それから鎮魂の玉をも天然笛をも引たくつて池の中へ投げ込んでしまった。そこへ「幸」という男が出てきて、いきなり自分が裸になり、その衣服を自分に着せてくれ、天然笛も鎮魂の玉も池の中から拾つて私に渡してくれた。

自分は一切の執着を捨てて、神命のまにまに北へ北へと進んで、知らぬまに元の天の八衢へ歸つておつた。これは残念なことをしたと思つたが、もと来た道をすうと通つて、扇形の道を通りぬけ白紙の所へ辿りついた。その時、「幸」が白扇の紙の半ほどのところまで裸のまま送つて来たが、そこで何処ともなく姿を消してしまつた。やはり相変らず、細い悲しいイヤらしい声が聞えて来る。その時、自分の身体は電気に吸いつけられるように、北方へ北方へと進んで行く。一方には大きな河が流れてあり、その河辺には面白い老松が並んでいる。左側には絶壁の山が屹立して、一方は河、一方は山で、其処をどうしても通らねばならぬ咽喉首である。その咽喉首の所へ行くと、地中から頭をヌツと差出し、ついには全

さ。

「幸」……聖師さまの実弟たる上田幸吉氏のこと。ご兄弟の中で、この方だけが一番聖師さまの御用に協力なされた。

身を頭わし、狭い道に立ち塞がつて、進めなくさせる男女のものがあつた。

そこで鎮魂の姿勢をとり天然笛を吹くと、二人の男女は温順な顔付にて、女は自分に一礼し、

『あなたは予言者のように思いますから、私の家へお入り下さいまし。色々お願いしたいことがございます』

と言つた。その時フト小さな家が眼前にあらわれてきた。その夫婦に八頭八尾の守護神が憑依していた。夫婦の話によれば、

『大神の命により神界旅行の人を幾人も捉えてみたが、真の人に会わなかつたが、はじめ今日目的の人に出会いました。実は私は、地の高天原にあつて幽界を知ろしめす大王の肉身系統の者です。どうぞ貴方はこの道を北へ北へと取つて下さい、そうすれば大王に面会ができます。私が言伝をしたと言つて下さい』

と言つて頼む。

『承知した、それなら行つて来よう』

こつ言つて立ち去ろうとする時、男女の後に角の生えた恐い顔をした天狗と、白狐の金毛九尾になつたのが眼についた。この肉体としては実に善い人間で、信仰の強い者だが、その背後には、容易ならぬものが魅入つてゐることを悟つた。そのままにして自分は一直線に地の高天原へ進んで行つた。トボトボと暫くのあいだ北へ北へと進みゆくと、一つの木造の

二人の男女……夫婦とあるように女は京都府船井郡八木町に住んでいた福島虎之助と妻久子（大本開祖出口ナオの第三女）のこと。

八頭八尾の守護神……悪神の頭目の陽性の悪霊で、世界の統治者・指導者に憑つて神霊世界や現実の世界を悪化しつづけてゐる邪霊。ウラル山から発生した。

地の高天原……ここでは綾部の大本開祖がおられる場所をさします。

大王の肉身系統の者……幽庁の判神（閻魔大王）の身の者。つまり大本開祖出口ナオの肉身ということです。

白狐の金毛九尾……印度に発生した極く陰性の邪氣が凝つた悪霊で、神代に常世姫命に憑依し罪惡の限りを尽くした悪狐。世

大橋がある。橋の袂へさしかかると川の向う岸にあたり、不思議な人間の泣き声や狐の声が聞えた。自分はその声をたどって道を北へと行って行くと、親子三人の者が寄って集って、穴にいる四匹の狐を叩き殺していた。見るみる狐は殺され、同時にその霊は女に憑いてしまった。女の名は「民」という。女は狐の怨霊のために忽ち膨れて脹満のような病体になり、俄然苦悶しはじめた。そこで其の膨れた女にむかつて、自分は両手を組んで鎮魂をし、神明に祈ってやると、その体は旧の健康体に復し、三人は合掌して自分にむかつて感謝する。されど彼の殺された四匹の狐の霊はなかなか承知しない。

『罪なきものを殺されて、これで黙っておられぬから、あくまでも仇討をせねばおかぬ』と、怨めしそに三人を睨みつめている。狐の方ではその肉体を機関として、四匹ながら這入って生活を続けてゆきたいから、神様に願って許していただきたいと歎願した。

自分はこの場の処置に惑うて、天にむかい裁断を仰いだ。すると天の一方より天使が頭われ、産土の神も頭われたまいて、

『是非なし』

と一言洩らされた。氏子であるとは言いながら、罪なきものを打ち殺したこの女は、畜生道へ墮ちて狐の容器とならねばならなかった。病氣は治ったが、極熱と極寒との苦しみを受けて、数年後に国替した。現界で言えば稲荷下のようなことをやったのである。

やや西南方にあたってまた非常な叫び声が聞えてきた。すぐさま自分は声を尋ねて行って

界の統治者・指導者の相手方の女の霊にのり憑る三種の邪神の一つです。

「民」……夫の森田太吉（現園部町木崎在）ら三人で、殺した四匹の狐の怨霊が妻の民の肉体を機関として入りこみ、稲荷下げのようなことをやっていた。その民は数年後に国替した。（『大地の母・6巻』参照）。

みると、盲目の親爺に狸が憑依し、また沢山の怨霊が彼をとりまいて、眼を痛めたり、空中へ身体を引き上げたり、さんざんに親爺を虐めている。見ると親爺の肩の下のところには棒状のものがあって、それに綱がかかっており、柱の真に取付けられた太綱を寄つてたかつて、弛めたり引きしめたりしているが、落下する時は川の淵までつけられ、つり上げられる時は、太陽の極熱にあてられる。そして釣り上げられたり、曳き下されたりする上下の速さ。この親爺は「横」という男である。

なぜにこんな目に遇うのかと理由を聞けば、この男は非常に強慾で、他人に金を貸しては家屋敷を抵当にとり、ほとんど何十軒とも知れぬほど、その手でやつては財産を作つてきた。そのために井戸にはまつたり、首を吊つたり、親子兄弟が離散したりした者さえ沢山にある。その霊がごとく怨念のために畜生道へ墮ち入り、狐や狸の仲間入りをしているのであつた。そのすべての生霊や亡霊が、身体の中からも、外からも、攻めて攻めて攻めぬいて命をとりききているのである。

何ゆえ神界へ行く道において、地獄道のようなことをしているのを神がお許しになつていかると問えば、天使の説明には、

『懲戒のために神が許してある。その長い太い綱は首を吊つた者の綱が凝固つたのである。

毒を嚙んで死んだ人があるから、毒が身の中に入っている。川へはまつた者があるから川へ突つ込まれる。これが済めば畜生道へ墜ちて苦しみを受けるのである』

「横……狸に憑依された盲目の親爺。この男は強欲者で人を苦しめてきたその怨霊が畜生道におち、狐狸の仲間に入って仇討ちをされていた。天使の言葉では、懲戒のために神が許してあるという。この男の肉体は一週間ほど経て現界を去つた。

と。あまり可愛相であるから私は天照大御神へお願いして「惟神靈幸倍坐世」と唱え、然笛を吹くと、その苦しみは忽ち止んでしまった。そして狐狸に化している霊は嬉々として解脱した。その顔には桜色を呈してきたものもある。これらの霊はすべて老若男女の人間に一変した。すると産土の神が現われて喜び感謝された。自分もこれは善い修業をしたと神界へ感謝し、そこを立ち去った。が、「横」という男の肉体は一週間ほど経て現界を去った。

それからまた真西にあたって叫び声がおこる。猿を責めるような叫び声がある。その声を尋ねてゆくと、本当の狐が数十匹集まり、一人の男を中において木にくくりつけ、「キヤッ、キヤッ」と言わして苦しめている。その男の手足はもぎとられ、骨は一本々々砕かれ、滅茶々にやられているのに現体が残ったままそこに立っている。自分はこれを救うべく、神名を奉唱し型のごとく鎮魂の姿勢をとるや否や、すべての狐は平伏してしまった。何故そんな事をするのかと尋ねれば、中でも年老った狐がすすみでて、

『この男は山獺が飯よりも好きで、狐葬を作ったり、係蹄をこしらえたりして楽しんでる悪い奴です。それがために吾々一族のものは皆命をとられた。生命をとられるとは知りつつも、油揚げなどの好きな物があればいいかかって、ここにいるこれだけの狐はこごとく命をとられました。それでこの男の幽体現体共に亡ぼして、幽界で十分に復讐

『したい考えである』

という。そこで私は

『命をとられるのは自分も悪いからである。それよりはいつそ各自改心して人界へ生れたらどうだ』

と言えは、

『人界へ生れられますか』

と尋ねる。自分は、

『生れられるのだ』

と答つれば、

『自分らはこんな四ツ足だから駄目だ』

という絶望の意を表情で現わしたが、自分は、

『汝らに代つて天地へお詫をしてやる』

と神々へお詫をするや否や、「中」という男の幽体は見るまに肉もつき骨も完全になつて旧の身体に復り、いろいろの狐はたちまち男や女の人間の姿になつた。その時の数十の狐の霊は、一部分今日でも神界の御用をしているものもあり、途中で逃げたものもある。中には再び畜生道へ堕ちたものもある。

(大正一〇・一〇・一九 旧九・一九 桜井重雄録)

「中」……数十匹の狐に苦しめられていた男。この男に山獺で一族のものが命をとられた復讐を受けていたもので、聖師さまが神々にお詫びをしてやると、男は見る間に救われ、沢山の狐も救われた。

瑞月

かくり世も現の世にも人々の

靈魂許りは同じはたらき

さゝやけ心のまよひは忽ちに

魂は根底の国に落ち行く